

ヴェーダーンタ哲学研究前史 : ウパニシャッド の受容

著者	加藤 隆宏
雑誌名	文化交流研究 : 東京大学文学部次世代人文学開発 センター研究紀要
巻	32
ページ	33-44
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/2261/00077276

ヴェーダーンタ哲学研究前史——〈ウパニシャッド〉の受容

加藤隆宏

多くの人はこの道を聞くことさへ極めて難し。

たとへ、それを聞くことあるも多くの人はそれを了解することなし。

希有なるかな、この道に関する真の教主を見出すこと。

希有なるかな、教へられて真にそれを了解するもの。

『カータカ・ウパニシャッド』第2章第7節（木村泰賢訳⁽¹⁾）

1. はじめに

原始仏教から比較思想に至るまで、広範な分野において数多くの業績を残したことで知られる中村元博士（1912-1999）は、研究者としてのキャリアをインド正統バラモン哲学の一つであるヴェーダーンタ哲学の研究からスタートした。中村は学位論文のテーマをヴェーダーンタ哲学とした当時を次のように回顧する。

『東方学回想』「学問の思い出—中村元博士を圍んで」

〔指導教官の〕宇井先生がおっしゃったことは、「學者になるにはインド思想一般を研究しろ。佛教だけをやったのでは新味のある研究は出てこない。學問的な研究にならない。〔中略〕についてはインド哲學から入るにしてもヴェーダーンタがいいだろう。ヴェーダーンタをやるとインド哲學のどこへもつながりがあるから、ヴェーダーンタをやれ」とおっしゃる。〔中略〕僕は先生のご指導の通りに従ったわけです⁽²⁾。〔 〕は筆者の補足

それからわずか5年の後に、学位論文は全4巻からなる「初期ヴェーダーンタ哲学史」として結実し、リヤカーで事務室に運び込まれたという。さらに数年後には、この学位論文にもとづく『初期のヴェーダーンタ哲学』（1950年）、『ブラフマストラの哲学』（1951年）、『ヴェーダーンタ哲学の発展』（1955年）、『ことばの形而上学』（1956年）が続けて公刊された⁽³⁾。中村のこの一連の研究は「ヴェーダーンタ4部作」と呼ばれ、日本のみならず世界における⁽⁴⁾ヴェーダーンタ哲学研究の金字塔となり今日に至る。

中村元はなぜヴェーダーンタ哲学を研究したのか、また博士の回顧にあるように、彼の指導教官がなぜ「ヴェーダーンタをやれ」と言ったのか。本稿は、このような問いに端を発し、中村元によってヴェーダーンタ哲学研究が確立されるよりもっと前、明治大正期の日本においてヴェーダーンタ哲学がどのように研究されてきたのか、特に、ヴェーダーンタの基本文典である〈ウパニシャッド〉文献群がどのようにして受容されてきたのか、その経緯をたずねていく。また、日本のインド学の源流であるヨーロッパ、特にドイツにおける〈ウパニシャッド〉受容についても考察する。インドからドイツそして日本という受容史において、〈ウパニシャッド〉

はどのようなものとして理解され、またどのような点が研究の対象とされたのか。このような考察を通じて、少し別の角度からヴェーダーンタ哲学の一端を明らかにしたい。

2. 日本における〈ウパニシャッド〉の受容

2.1 仏教の源流としての〈ウパニシャッド〉

ヴェーダーンタ哲学とはインドの正統バラモン哲学の一つに数えられる学問伝統で、他の伝統の多くがすでに消滅してしまった現代においても、依然として宗教思想界に大きな影響力を持ち続けている。ヴェーダーンタ（ヴェーダの最終部分）という言葉が指し示す〈ウパニシャッド〉文献群に説かれる形而上学的議論を体系的に扱った根本聖典『ブラフマーストラ』の伝統に則り、〈ウパニシャッド〉の解釈学を基礎としながら、『バガヴァッドギーター』といった宗教文献の救済論などをその教義体系に取り込みつつ発展してきた。特徴としては、〈ウパニシャッド〉にあらわれるブラフマン（梵）という絶対存在を唯一の实在原理としてたてる一元論的思想を展開する。

このヴェーダーンタ哲学が日本において研究対象とされるに至った経緯を探る前に、日本におけるインド哲学研究の受容について少し見てみたい。以下に引用する一節は、日本においていったいなぜインド哲学が研究されるに至ったのかという疑問に対する、一つの明快な回答である。

服部・長尾「インド思想の潮流」

日本のインド研究は、植民地統治の必要から生まれたものでもなく、未知の東洋へのエキゾチズムや浪漫的憧憬に駆られて進められたものでもない。そして、ギリシア語・ラテン語の古典をもたない日本人には、サンスクリットに対する言語学的興味も希薄であった。日本のインド学の主流は「仏教の母国インド」への宗教的憧憬を背景にして形成されてきたのである⁽⁵⁾。

「仏教の母国インドへの宗教的憧憬」は、仏教が生まれ育まれた宗教的・思想的背景に対する関心として顕れた。また、インド諸語で残された仏教文献の原典に触れ、それを直接読み解こうとする情熱が、サンスクリット語やパーリ語といった言語に対する興味を呼び起こしたのである。このような背景から、日本においてはまず、仏教を理解するための補助学としてインド哲学が要請されたことになる。英国オックスフォードのマックス・ミュラー（Max Müller, 1823-1900）に師事し、サンスクリット文献学の手法を学んだ笠原研寿（1852-1883）や南条文雄（1849-1927）などは、こうした仏教理解のための近代インド学の方法論を日本に紹介した最初期の人物である。また、彼らより少し後に、同じくマックス・ミュラーのもとで学び、帰国して東京帝国大学の梵語学講師となった高楠順次郎（1866-1945）も、日本の仏教学の近代化に果たした役割は大きい。

2.2 高楠順次郎と『ウパニシャット全書⁽⁶⁾』

高楠順次郎といえば、『大正新脩大藏経』(1924-34)の編纂という大事業があまりにも有名であるが、ここでは、その少し前に刊行された『ウパニシャット全書』(1922-24、以下『全書』)の企画・監修・翻訳という仕事に着目してみよう。〈ウパニシャット〉文献群に対しては、例えば、1801/2年にフランスのインド学者アンクティル・デュペロン(Abraham-Hyacinthe Anquetil-Duperron, 1731-1805)によってラテン語訳が発表され⁽⁷⁾、1805年にはコールブルックによる『アイタレーヤ・ウパニシャット』の英訳が発表されるなど⁽⁸⁾、インド学研究史上かなり早い段階から注目が集まっていた。高楠にとっては、彼がドイツのキールにて師事したオルデンベルク(Hermann Oldenberg, 1854-1920)の影響は特別なものがあつたに違いない。オルデンベルクは、歴史的人物としての仏陀の生涯、彼の教え、そして仏教教団について、パリ仏典を資料として文献学的に実証した *Buddha, sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde* (1881, 「仏陀、その生涯、教理、教団」) を発表している⁽⁹⁾。この著作については、1910年に三並良による邦訳『仏陀』が発表されたが⁽¹⁰⁾、高楠はおそらくそれよりもっと前、少なくとも1895年にイギリスからドイツに拠点を移す前にはこの著作に親しんでいたと思われる。オルデンベルクはさらに、仏教の源流を〈ウパニシャット〉に求めようという研究を *Die Lehre der Upanishaden und die Anfänge des Buddhismus* (1915, 「ウパニシャットの教説と仏教の始原」) としてまとめた⁽¹¹⁾。1919年にオルデンベルクをドイツに訪問した高楠は、面談のうちに同書の邦訳を託されたとしている。その翌年にオルデンベルク死去の報に接した高楠は、1920年5月24日に東京朝日新聞に寄せた追悼文「嗚呼オルデンベルヒ氏」においてその面談をこう振り返る。

東京朝日新聞「嗚呼オルデンベルヒ氏」

[筆者註：オルデンベルクの] これらの著書に次いで苦心の作は「ウパニシャットと原始仏教」である。この著は、昨冬面談の時、その全和訳を予に委嘱せられた。予はその書の大体に於て予の印度哲学史の構成に似たるを話し、予が終始ドイッセン氏の陳述を脱せんことに苦心したるを述べし時、氏は自身がドイッセン氏に反したる点を指摘し、特別の注意を払わんことを要求せられた⁽¹²⁾。

この述懐から、高楠は〈ウパニシャット〉から仏教へという「印度哲学史の構成」をオルデンベルクと共有していたことがわかる。

同じくキール時代に、高楠はパウル・ドイセン(Paul Deussen, 1845-1919)に師事し、〈ウパニシャット〉を研究した⁽¹³⁾。ドイセンは1897年に公刊した *Sechzig Upanishad's des Veda* (『ヴェーダのウパニシャット六十篇』、以下『六十篇』) において〈ウパニシャット〉文献群のうち六十篇を独訳している。またそれに先立つ1883年には *Das System des Vedānta* (『ヴェーダーンタの体系』) において、〈ウパニシャット〉文献を体系的に扱う『ブラフマーストラ』とその代表的な註釈書である『シャンカラ註解』の研究を発表し、インド思想史の中心的思潮であるとその当時考えられていた〈ウパニシャット〉からシャンカラのヴェーダーンタ哲学へという一つの潮流について解明した。高楠が在独時代に親しく学んだ二人の存在が、高楠のウパニシャット観またヴェーダーンタ哲学理解に与えた影響は無視できないものがあるだろう。

仏教の源流としての〈ウパニシャッド〉の和訳を企図した『全書』は、高楠を含む総勢26名の訳者によって完成された。訳者の中には、先のエピソードで中村にヴェーダーンタ研究をすすめた宇井伯寿も含まれている。『全書』はもともと1920年から1924年にかけて刊行された『世界聖典全集』の一部をなすものであり、その編集に携わった高楠が、英国時代に師事したマックス・ミュラーが監修する〈東方聖典叢書 (Sacred Books of the East)〉を意識したことは想像に難くない。なお、1879年に公刊された〈東方聖典叢書〉第一巻にはマックス・ミュラー自身の翻訳による諸〈ウパニシャッド〉の英訳が収録されている。

『全書』では125篇の〈ウパニシャッド〉が訳出されている。これは先行するいくつかの翻訳集に比べてもかなり充実した内容となっており、〈ウパニシャッド〉に対する関心の高さがうかがわれる。各篇の「解題」には、使用テキストや翻訳が記されている場合もあり、そこから翻訳に使用した底本についてある程度推測できる⁽¹⁴⁾。これらの断片的な情報を総合するならば、*Muktikā-Upaniṣad* にリストアップされる108篇の〈ウパニシャッド〉を収録した『108ウパニシャッド⁽¹⁵⁾』をテキストとしつつ、参照可能なものについてはドイセン、マックス・ミュラー、コールブルック等の翻訳を参照したようである⁽¹⁶⁾。また、前半の60篇の構成についてはドイセンの『六十篇』に範を求めた可能性が高い。第1巻の冒頭に作成された「ウパニシャット全表」の前半部分、最初の50篇については、分類方法や表記の順序など、すべてドイセンのそれに従った形となっている⁽¹⁷⁾。ドイセンはこれら50篇にラテン語からの重訳版「ウブネカット」10篇を加えて全60篇とするが、『全書』ではこの50篇に続いて65篇の「奥義末詮」を挿入し、最後にドイセンによって選出されたものと同じ10篇の「ウブネカット」を据えるために全125篇の構成となっている⁽¹⁸⁾。

また、ドイセンの『六十篇』では、彼が篤く信奉するショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) への献辞と彼の著作からの一節が引用されるが⁽¹⁹⁾、これと同じ一節からの抜粋が、高楠の『全書』第1巻冒頭、「光は東方より来る」と標された頁にサー・エドウィン・アーノルド⁽²⁰⁾の言葉と並んで引用される。

ショーペンハウアー著『余録と補遺』

凡、世界に現存せる讀物にして、効果を齎らすこと極めて多く、崇高の念を起こさしむること最大なるものは、即これ。こは予が生の安慰たりき。而して亦予が死の安慰たらん⁽²¹⁾。

「シヨッペンハウエル (A. Schopenhauer)」の言葉を借りて、西洋から見た東洋という視点、さらには、智慧の「光」が東洋にあるという高楠の思いがここに表されているとみることができかもしれない。いずれにせよ、高楠の『全書』が『六十篇』の編者ドイセンのみならず、〈ウパニシャッド〉を生涯の慰めであると賛美するショーペンハウアーの眼差しまでも意識したものであったことがここから読み取れる。

2.3 ショーペンハウアーと〈ウパニシャッド〉

後にショーペンハウアー協会⁽²²⁾を設立するほどまでにショーペンハウアーに傾倒したドイ

センに学んだ日本人が高楠の他にもいる。東京帝国大学宗教学講座の初代教授となった姉崎正治(1873-1949)である。姉崎は、井上哲次郎やケーベルについて学び、留学前の1898年には「非理性主義の観念論、吠檀多とショーペンハウエル⁽²³⁾」と題した論文を発表するなど、ショーペンハウアーとヴェーダーンタ哲学との関係について強い関心を寄せていた。姉崎は、高楠の在独から数年後に同じドイツに学び、帰国後にはショーペンハウアーの主著 *Die Welt als Wille und Vorstellung* を翻訳して『意志と現識としての世界』(1910)として発表した。兵頭1989によれば、明治33年(1900)以降、「官学アカデミズムの代表誌たる『哲学雑誌』⁽²⁴⁾」上からショーペンハウアーは姿を消し、「『帝国文学』、『太陽』等の広義の文壇誌においても次第にニーチェの陰に追いやられていく⁽²⁵⁾」という。そのような状況の中、ショーペンハウアーを積極的に受け入れたのがインド学者や仏教学者たちであった。

兵頭2007：

明治30年前後にショーペンハウアーに関する短い流行があった後は、明治45年(1912)年二月号にドイツにおけるショーペンハウアー協会設立のニュースが「雑録」に載ったのを最後に、昭和に至るまでその目次にショーペンハウアーの名を目にすることはついぞないが、これは当時の日本の哲学界の状況を反映するものであった。[中略] そうした中でショーペンハウアーの哲学は、姉崎をはじめとするインド学・仏教学の世界にその一部が受けつがれていく。[中略] しかし、大正期におけるショーペンハウアー(あるいはドイツセン)の受容について語るとすれば、その代表は木村泰賢(1881-1930)である⁽²⁶⁾。

ドイツセンと姉崎を通じてショーペンハウアーの学問的影響を受けたとされる木村の著『原始仏教思想論⁽²⁷⁾』には「ショーペンハウアー流の解釈が随所に見られ⁽²⁸⁾」という。ウパニシャッドおよびヴェーダーンタ哲学の受容について、ここには、ショーペンハウアーからドイツセン、高楠、姉崎、そして木村というように、師資相承とはいかないまでも一つの道筋のようなものを見出すことができる⁽²⁹⁾。冒頭で触れた、中村博士がヴェーダーンタ研究を選択した(選択することを勧められた)という出来事も、この延長線上に起こったであるととらえることができるだろう。

3. ヨーロッパにおけるウパニシャッドの受容

3.1 『ウプネカット』

ショーペンハウアー著『余録と補遺』

『ウプネカット』の何と徹底してヴェーダの聖なる精神を呼吸していることよ！熱心な読書によってこの無比の書物のペルシア語＝ラテン語訳に通暁した人は、かの精神によって心の奥底から何と激しく感動させられることよ！その一行一行が何と確固として明瞭な、しかもどこまでも調和した意義に充滿していることよ！そして更にどの頁からも深く根本的で崇高な思想が我々に立ちあらわれ、気高く聖なる厳粛さが全

体にひろがっている⁽³⁰⁾。

ショーペンハウアーのこの言葉が物語るように、彼は『ウプネカット』（ウパニシャッド）を愛読するなど、インド思想に深く心酔した。その彼の思想は日本のインド学・仏教学の分野に受け継がれていったわけであるが、その同じインド学・仏教学の分野において、ショーペンハウアーのウパニシャッド理解、さらにはインド思想理解の妥当性や正確さはしばしば疑問視されてきた。以下には、ショーペンハウアーの手にした『ウプネカット』なる文献の正体を探りながら、ウパニシャッドの受容の更なる源流を17世紀末から18世紀初頭にかけてのヨーロッパに求めていこう。

ショーペンハウアーがインド関連の書物を始めて手にしたのは、1813年から1814年にかけてワイマールのアンナ・アマーリア図書館から4か月間借りだした *Das Asiatisches Magazin*⁽³¹⁾ 所収の『バガヴァッドギーター』であろうと考えられている⁽³²⁾。これはドイツの東洋学者フリードリヒ・マイヤー（Friedrich Majer, 1772-1818）の手によるもので、1785年にチャールズ・ウィルキンス（Charles Wilkins, 1749-1836）がヨーロッパ世界に初めて紹介した『バガヴァッドギーター』の英訳⁽³³⁾をドイツ語に重訳したものである。そして、この本を返却したすぐ後に、ショーペンハウアーは *Oupnek'hat*（『ウプネカット』）を借りており、これがショーペンハウアーと後に彼が愛読することになる〈ウパニシャッド〉との出会いであったとされる⁽³⁴⁾。では、ショーペンハウアーが手にした『ウプネカット』とはいったいどのような書物であったのか。

3.2 『ウプネカット』の問題

ムガル帝国第5代君主シャー・ジャハーンの子で皇太子であったダーラー・シュコー（Dārā Shukoh, 1615-1659）は、イスラームのスーフイズムと〈ウパニシャッド〉の神秘思想が同一であることを論じた *Majma' ul-Bahrain*（1654, 『二つの海の交わる場所⁽³⁵⁾』）などの著作を残したことで知られる文人でもある。ダーラー・シュコーは帝位継承の争いに敗れることになるのだが、彼が弟のアウラングゼーブに処刑される2年ほど前に完成したのが〈ウパニシャッド〉52篇のペルシャ語訳 *Sirr-i-Akbar*（1657, 『大いなる秘密⁽³⁶⁾』）である。このペルシャ語版が後にフランスのインド学者アンクティル・デュペロンによってラテン語に重訳されたものが『ウプネカット（*Oupnek'hat*）』としてヨーロッパに紹介され、インド思想がヨーロッパに広く知られる一つのきっかけとなったことはつとに知られるところである。このことからわかるように、ショーペンハウアーのみならず、当時のヨーロッパの読者が手にとった〈ウパニシャッド〉は、デュペロンの重訳版もしくはこの重訳版からさらに各国語に翻訳されたものであり、彼らが出会ったインド思想は、その原型からかなりかけ離れたものであったことが後の研究者等によって取り上げられ、ショーペンハウアーもしばしば批判的となっている。

西尾「ショーペンハウアーの思想と人間像」

いずれにしても、ショーペンハウアーの依拠した唯一のインドの知恵の書、彼が「今生において最高の慰めの書」と呼んだ本が、翻訳としてははなはだ不完全であったことだけは、疑うことができない⁽³⁷⁾。

『ウブネカッタ』の翻訳の不完全さということについては、ペルシャ語からラテン語への重訳を行ったデュペロン、さらには、サンスクリット語原典からペルシャ語への翻訳を行ったダーラー・シュコーにまで批判の矛先が向けられる。

福島直四郎「ウブネカッタ解題」

しかり、デュペロンの翻訳文体は、ラテン文法を犠牲にしてまで、ペルシャ原文に忠実たらんとせし結果、一種異様のラテン語となり、欧州学者はこれをペルシャ・ラテン語と称するに至れり。しかりといえども、原文と註釈とを混合せしはデュペロンの罪にあらず、また翻訳文体に関しては、デュペロン自身の立脚地あり、抱負あり、理想あり。これを明らかにせずしてみだりに非難するはあたかも的なきに矢を発つに等し⁽³⁸⁾。

『ウブネカッタ』には、〈ウパニシャッド〉の原文にみられない文言が多く含まれることは研究者が度々指摘するところである。しかしこれには、福島の言うように「デュペロンの罪」とばかりも言えない事情があった。ダーラー・シュコーの「序文」によれば、1640年にカシュミール地方でインドのパンディット（伝統学者）と出会い、インドに伝わる〈ヴェーダ聖典〉の精髓を解説する〈ウパニシャッド〉文献群の存在を知らされ、その後1656/7年にインドのパンディットの力を借りて52篇の〈ウパニシャッド〉を翻訳したという。

アंकティル・デュペロン『ウブネカッタ』「ペルシャ語訳序文」（福島訳）

ヘジラ紀元1067年、キリスト紀元1656-1657年に、ダーラシャコーは上記種族の知識の府にして、彼の治下に在りしベナレス市より、ヴェーダおよびウブネカッタの読解に通曉せるパンディット（博士）およびサヌヤーシン（遊行比丘）を招き、このいみじき古典、実にコーランの隠れたる源泉たるこの書を忠実にペルシャ語に翻訳せんとせり⁽³⁹⁾。

福島直四郎「ウブネカッタ解題」

乞う、原語に精しからざる人が、その語を母語とする外人より、説明的翻訳を聞かされ、これをそのまま手記する光景を想起せよ。ダーラシャコーがいかん梵語に通ぜしかは知らざれど、彼が不明の箇所をその顧問たりしパンディット（博士）に質問し、パンディットは原文を離れて、その知るがままに古来の註釈を混じて説明したる結果が、この翻訳となりて現出せしなりとせばあるいはその真相に近きものならん⁽⁴⁰⁾。

ダーラー・シュコー自身は、おそらく、〈ウパニシャッド〉の書かれたサンスクリット語にそれほど通じているわけではなかったから、不明な箇所についてはパンディットの解説を求めたこともあったであろう。請われたパンディットたちは、当時伝承されていた註釈などにもとづいて補足的な解説を加えたはずである。推測の域をでないものの、その際に参照されたウパニシャッド註解書にはヴェーダーンタ哲学の中興の祖ともいわれる思想家シャンカラの『註解書』も含まれていたに違いない⁽⁴¹⁾。このように、ダーラー・シュコーの翻訳は、もとあった〈ウパニシャッド〉の原典に忠実なものではなく、後代の様々な解釈が混じりこんだ形であったということになる。そのテキストがさらにデュペロンの「ペルシャ・ラテン語」に翻訳され、そ

れを手にしたのがショーペンハウアーであった。

しかしながら、やはり、彼らを不完全な翻訳を流布したかどで責めることはできないだろう。伝承知というものを時間を超えて連続する一つの知の集合体と考えるインドのパンディットたちにとって、〈ウパニシャッド〉のオリジナルが千年以上前に成立した——という時代的な時間感覚を彼らももっていたかどうかという点をも含めて——ということの問題にしていたとは考えにくい。ダーラー・シュコーの頼ったパンディットたちも、彼らの師から受け継ぎ、現に彼らが暗誦する知こそが正統なものであることを疑うことはなかったはずだ。そのような事情をダーラー・シュコーが知る由もない。デュペロンの場合も同様、特別な事情は知らず、ペルシャ語の写本をそのまま翻訳しただけである。彼はもともとフランス語による翻訳を考えたが、オリジナルを損なう恐れから、ラテン語による忠実な翻訳を行ったという⁽⁴²⁾。

では、ショーペンハウアーはどうか。彼もおそらく手にした『ウプネカット』の来歴について細かな事情は知らず、この書がインド思想の精髓を伝えるものであるということを少しも疑わなかったであろう。しかし、彼の場合には、ダーラー・シュコーやデュペロンとは少し事情が異なり、後の研究者からはその点が批判されることになる。

グラーゼナップ『ドイツの思想家のインド観』

彼 [= ショーペンハウアー] は、すでにウパニシャッドのより厳密な翻訳、アンクティルの翻訳のようにペルシャ語が基礎になっているのではなく、直接サンスクリット原典を基礎にしたものが存在しているのに、「真実で秘教的なウパニシャッド教義に関する真の知識は（1851年の）この時までただウプネカットによつてのみ到達された」という意見に固執したのである⁽⁴³⁾。（〔 〕は筆者の補足）

ショーペンハウアーの時代は、インド学関連の文献が盛んにヨーロッパへと紹介された時期と重なる。文献学的な立場からすれば、ショーペンハウアーが別の翻訳等を参照せず、不完全な翻訳にもとづく理解に固執し続けたこと、〈ウパニシャッド〉以外の文献には興味を示さなかったことなどは評価できない。グラーゼナップは、ショーペンハウアーの態度を次のように要約する。

グラーゼナップ『ドイツの思想家のインド観』

ショーペンハウアーのインドへの関心はせいぜいその宗教及び哲学にのみ向けられていた。しかも彼の心をとらえてはなさなかったのは、ヴェーダーンタや佛教のように、彼自身の学説の正しさを証明してくれると彼に考えられた体系のみであった⁽⁴⁴⁾。

ここまでくると、ショーペンハウアーにとっては、自説を裏付けてくれるものであれば、それがどんな由来のものであっても、どんな学説でもよかったとうことになるのかもしれない。周知のとおり、ショーペンハウアーについては、その後さまざまな研究者によってその学説が検証されつつ今日に至っている。インド学者による評価としては、グラーゼナップのもののように、ショーペンハウアーの学説の妥当性を疑うものが多くみられる。

しかし、当時の限られた資料のなかからインド思想の精髓を汲み取り、それを自らの哲学にまで昇華させたショーペンハウアーのインド理解を、不完全な翻訳にもとづくという理由だけ

によって切り捨ててしまうことは適切ではないだろう。原典にもとづく厳密な文献学的方法によってインド思想の原型を理解しようとする学問的関心・態度からすれば、ショーペンハウアーの間違いだらけのインド理解は取るに足りないものかもしれない。しかし、それとは別に、現にインドからヨーロッパそして日本へと続く〈ウパニシャッド〉の受容の一つ潮流の起点となったという事実とその意味についてはしっかり受け止めるべきであり、その点からも彼の仕事は再評価されるべきであろう⁽⁴⁵⁾。

4. おわりに

以上、〈ウパニシャッド〉文献が受容されてきた一つの道筋のようなものをてがかりに、日本、ヨーロッパ、イスラーム、インドと駆け足で辿ってきた。その中で、これら異なる文明圏において、〈ウパニシャッド〉がどのような問題意識のもとに受容されてきたのか、また、そのうちの異なる部分や共通する部分はどのようなものであるのかなど、関連する問題の一端を垣間見ることができた。

しかし、本論では20世紀のヴェーダーンタ研究から遡り、ダーラー・シュコーのペルシャ語翻訳という17世紀頃のイベントによりやくたどり着いただけである。〈ウパニシャッド〉文献群の古層が成立し始めたのが紀元前5～6世紀頃、その後、〈ウパニシャッド〉の解釈学としてヴェーダーンタ哲学が体系づけられ、シャンカラなどの註釈家が活躍するのが8～9世紀頃、その後、ヴェーダーンタ諸派が成立し、それら諸派によって〈ウパニシャッド〉が伝承されてきた。今回の考察ではこうした経緯の詳細にまで考察の範囲を広げることができなかつた。また、「ヴェーダーンタ」を、三学問 (Prasthānatraya) と呼ばれる〈ウパニシャッド〉文献群、『ブラフマーストラ』、『バガヴァッドギーター』とそれらに対する註釈を基本本文典として発展した伝統学問として定義するならば、今回簡単に触れるのみに終わった『ブラフマーストラ』や『バガヴァッドギーター』の受容史も当然考慮に入れるべきであろう。これらの点については別稿を期したい。

中村博士以降の半世紀のヴェーダーンタ哲学研究の状況を振り返ってみると、研究の多くは個々の思想家やテキストに対する個別的な関心にとどまるものであり、その成果も十分とはいえない。後代のヴェーダーンタ学者による〈ウパニシャッド〉の註解書などについても、信頼できるテキストや訳註が出揃わず、多くの仕事を手付かずのまま残されている状況である。

ダーラー・シュコーがインドのバンディットの協力を得ながら〈ウパニシャッド〉の翻訳を作成したのが17世紀。その翻訳は〈ウパニシャッド〉原文と註釈が混在した状態であるという。その時にバンディットが拠った註釈とはどのようなものであったのだろうか。またそれは、14～17世紀頃、ヴィジャヤナガル王朝 (1346-1649) によって主導されたシャンカラ派のリヴァイヴァルとの関連はどの程度あったのか⁽⁴⁶⁾。こうした問題についても簡単に結論がでるようなものではなく、さらなる精査が待たれる。

本論は「ヴェーダーンタ哲学研究前史」と題したものの、本論で触れることができたのは前

史のほんのごくわずかであると言わなければならない。このように考えた時、厳密な文献学を標ぼうする我々もまた、ダーラー・シュコーヤショーペンハウアーとそれほど変わらない場所に立っているということを忘れてはならないだろう。

註

- (1) 高楠順次郎編『ウパニシャット全書四』所収。(旧字は適宜新字に改めた。)
- (2) 『東方学回想』VIII. 「学問の思い出—中村元博士を圍んで」 p. 183.
- (3) 中村博士はこの一連の研究「初期ヴェーダーンタ哲学史」により、日本学士院恩賜賞を受賞(1957年)された。
- (4) 4部作のうちの一部は後に英訳され、*A History of Early Vedānta Philosophy* Vol. I (1990), Vol. II (2003)として紹介された。
- (5) 服部・長尾 1969: 11. 「インド思想の潮流」
- (6) 高楠は一貫して「ウパニシャット」という呼称を用いるため、書名等で高楠の使用に関する場合は「ウパニシャット」とする。呼称としては「ウパニシャッド」の方がより一般的であるので、それ以外の箇所については統一的に「ウパニシャッド」とする。
- (7) Abraham-Hyacinthe Anquetil-Duperron. *Oupnek'hat*. Parisiis: Apud eosd. Bibliopolas. 1801/2.
- (8) Henry Thomas Colebrooke. "On the Vedas, or Sacred Writings of the Hindus." *Asiatic Researches* VIII. Calcutta, pp. 369-476. (Reprint in *Essays on the Religion and Philosophy of the Hindus*. London: Williams and Norgate. 1858, pp. 1-69.)
- (9) Hermann Oldenberg. *Buddha, sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde*. Berlin: Verlag von Wilhelm Hertz. 1881.
- (10) オルデンベルク著, 三並良訳『仏陀』東京: 梁江堂書房, 1910.
同書の翻訳はその後木村泰賢らによっても発表された。
オルデンベルク著, 木村泰賢・影山哲雄訳『佛陀』東京: 大雄閣, 1928. (再版『仏陀、その生涯、教理、教団』東京: 書肆心水, 2011.)
- (11) Hermann Oldenberg. *Die Lehre der Upanishaden und die Anfänge des Buddhismus*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. 1915.
- (12) 鷹谷 1957: 180. その後、オルデンベルクの著書は和訳された。
オルデンベルク著, 高楠順次郎・河合哲雄共訳『ウパニシャットより佛教まで』東京: 大雄閣, 1930.
- (13) 『高楠順次郎先生伝』 p. 33.
- (14) 例えば、「カイヴルヤー・ウパニシャット (*Kaivalya-Upaniṣad*)」の解題では、『二十八奥義書原本』『百八奥義書原本』『アーナンダ・アーシュラマナ版本』の三つのテキストにもとづき、ウェーベル (A. Weber) とドイセンの翻訳を参考にしたとある。(『全書』第2巻, p. 302.)
- (15) *Daśopaniṣacchāntisametā aṣṭottaraśatam upaniṣadaḥ*. Ed. Tukārāma Tātya. Bombay. 1895.
- (16) 『全書』における〈ウパニシャッド〉の選出の理由等についても詳細な説明はなく、次のように簡単に付言されるのみである。「そこで我々の計画しつつある『ウパニシャット全譯』に於ては、あらゆるウパニシャットを網羅して、この方面に於て研究の薄い我國の學界に成るべくその全體を提示して、遺憾なからしめんとする希望である。」(第1巻, p. 284.)
- (17) 『六十篇』においてドイセンは、*Muktikā-Upaniṣad* に列挙された108篇のリスト、『ウブネカット』に収録された50篇、コールブルックのリスト、アタルヴァ・ヴェーダ系〈ウパニシャッド〉に註解を著したナーラーヤナのリストなどを参照しながら〈ウパニシャッド〉を分類列挙した。〈ウパニシャッド〉の選出方法については、“E. Die Upanishad's des Atharvaveda”のイントロ部分に詳しい。(『六十篇』 p. 531-543.)
- (18) 『全書』第1巻, p. 1-4; 『六十篇』目次, p. IX-XXVII.

- 60 篇の〈ウパニシャッド〉に関して、『全書』は『六十篇』と同じ分類を採用するが、後半に続く「続ウパニシャット六十五書」の選出列挙順についての詳細は不明。
- (19) Den Manen Arthur Schopenhauers (ショーパンハウアーの御魂に捧ぐ) という献辞に続き、ショーペンハウアー著『余録と補遺 (*Parerga und Paralipomena*, 1851)』からの一節が引用される。
- (20) 『バガヴァッドギーター』の翻訳者の一人。Edwin Arnold, *The Song Celestial, or Bhagavad-gītā*. Trübner. 1885.
- (21) “Ex Oriente Lux” というラテン語の成句が標された裏面には同句の原文が引用される。
 “Es ist die belohnendeste und erhebendeste Lektüre, die auf der Welt möglich ist; sie ist der Trost meines Lebens gewesen und wird der meines Sterbens sein.”
 同句はショーペンハウアーの〈ウパニシャッド〉観をよく示すものとしてたびたび引用される。
 Cf. von Glasenapp 1960 : 71-72; 大河内 1983 : 99.
- (22) 兵頭 1989 : 138.
- (23) 姉崎正治「非理性主義の観念論、吠檀多とショペンハウエル」『哲学雑誌』13, 1898, p. 355-376.
- (24) 兵頭 1989 : 137.
- (25) 兵頭 1989 : 137-139.
- (26) 兵頭 2007 : 213.
- (27) 木村泰賢『原始仏教思想論』東京：丙午出版社、1922.
- (28) 兵頭 1989 : 142-143; 川田 1976 : 62.
- (29) 木村泰賢は東京帝国大学に着任後（1912 年から講師、1917 年から助教授）の 1915 年から 1919 年にかけて「ウパニシャッド原典講読」という講義を担当していた。『文学部資料』pp. 1-2.
- (30) von Glasenapp 1960 : 71-72; 大河内 1983 : 99.
 ショーペンハウアー「余録と補遺 2」(*Parerga und Paralipomena* II, § 184)
- (31) Friedrich Majer. “Der Bhagvat-Geeta, oder Gespräche zwischen Kreeshna und Arjoon.” *Asiatisches Magazin* Bd. 1 : 406-453; Bd. 2 : 105-132; 229-255; 273-293; 454-471; 477-490. 1802.
- (32) App はワイマール図書館に残された図書貸出記録から、ショーペンハウアーとインド思想との出会いを推察している。(App 2006 : 50.)
- (33) Charkes Wilkins. *The Bhāgvat-gēetā, or, Dialogues of Krēeshnā and Ārjōōn*. London : C. Nourse. 1785.
- (34) ショーペンハウアーとマイヤーとは、ショーペンハウアーの母親のサロンを通じて親交があり(西尾 1975 : 63)、これらインド関係の文献をショーペンハウアーに紹介したのもマイヤーである可能性が高いという。(App 2006 : 46-47.)
- (35) Mahfuz-ul-Haq 1929 : 12. 榊 1987 : 968.
- (36) 榊 1987 : 967.
- (37) 西尾 1975 : 65.
- (38) 『全書』7, p. 413. (旧字は適宜新字に改めた。)
- (39) *Oupnek'hat*, “Praefatio Interpretis Persici.” pp. 1-6.
 アンクティル・デュペロン『ウブネカット』[「ベルシャ語訳序文」]. 福島訳『全書』7, p. 410.
- (40) 『全書』7, p. 414. (旧字は適宜新字に改めた。)
- (41) 『ウブネカット』には「マーヤー(幻影)」説が現れ、ショーペンハウアーはこれを「個別化の原理」などとして取り上げ、彼の超越的観念論と関連付けて論じている。(von Glasenapp 1960 : 86-87.) しかし、このマーヤー説は〈ウパニシャッド〉において必ずしも中心的な位置を占めるものではなく、後代の思想家シャンカラの用いた重要概念であることが知られている。この点についてここでは詳しく論じないが、更なる検討が必要である。
- (42) 西尾 1975 : 64.
- (43) von Glasenapp 1960 : 99. (大河内 1983 : 132.)

- (44) von Glasenapp 1960 : 98. (大河内 1983 : 132.)
- (45) ショーペンハウアーが扱ったテキストの不備にのみ目を向けることは、もしかするとショーペンハウアー、さらにはショーペンハウアーに続くものたちが到達し得た〈ウパニシャッド〉の本質を見失うことになるのかもしれない。
西尾 1975 : 77 : 「不完全なテキストから、大筋だけは、少なくとも基本的なことだけは掴み出した精神的な動機、ないし情熱は、やはり尊敬に値することであったと思う。」
湯田 1996 : 211-212 : 「綿密に検討すれば、ショーペンハウアーのインド哲学の理解は、大部分正しくない。このことを、わたくしは本書において明らかにした。“お前がそれである”というウパニシャッドのテキストを彼は正しく理解していない。[中略]しかし、ショーペンハウアーがインド哲学を専門的に正しく理解したか否かということによってのみ、われわれは彼の哲学を判断すべきではない。」
- (46) Kulke 2016 : 188.

略号および参考文献

- 『全書』 高楠順次郎編『ウパニシャット全書』1-9巻. 東京：世界文庫刊行会. 1922-1924.
- 『東方学回想』 東方学会編『東方学回想』VIII. 東京：刀水書房. 2000. (『東方学』90輯. 1995.)
- 『文学部資料』 東京大学文学部インド哲学仏教学研究室編『東京大学文学部印度哲学講座101周年記念資料』東京大学大学院人文社会系研究科インド哲学仏教学研究室. 2018.
- 『六十篇』 Paul Deussen. *Sechzig Upanishad's des Veda*. Leipzig : Brockhaus. 1897.
- App 2006 Urs App. “Schopenhauer’s Initial Encounter with Indian Thought.” *Schopenhauer Jahrbuch* 87. 2006. pp. 35-76.
- Kulke 2016 Hermann Kulke and Dietmar Rothermund. *A History of India*. 2016. (London : Croom Helm. 1986.)
- Mahfuz-ul-Haq 1929 M. Mahfuz-ul-Haq. *Majma' ul-Bahrain or The Mingling of the Two Oceans by Prince Muhammad Dārā Shikūh*. Edited in the original Persian with English Translation, Notes and Variants. Calcutta : The Asiatic Society. 1929.
- von Glasenapp 1960 Helmut von Glasenapp. *Das Indienbild deutscher Denker*. Stuttgart : Kohler. 1960.
- 大河内 1983 大河内了義 訳；ヘルムート・フォン・グラージェナップ著『東洋の意味—ドイツ思想家のインド観』京都：法蔵館. 1983.
- 川田 1976 川田熊太郎「大正昭和期におけるショーペンハウアー」『実存主義』76. 1976.
- 榊 1987 榊和良「インド思想とイスラム—ダーラー・シュコーの理解」『印度學佛教學研究』35-2. 1987. pp. 965-968.
- 鷹谷 1957 鷹谷俊之『高楠順次郎先生伝』東京：武蔵野女子学院. 1957.
- 西尾 1975 西尾幹二『ショーペンハウアー—意志と表象としての世界』世界の名著 続10, 中央公論社. 1975.
- 服部・長尾 1969 服部正明・長尾雅人『世界の名著1バラモン教典』中央公論社. 1969. pp. 5-56.
- 兵頭 1989 兵頭高夫「日本におけるショーペンハウアー受容の問題—ケーベルを中心に」『武蔵大学人文学会雑誌』21巻1・2号. 1989. pp. 123-147.
- 兵頭 2007 兵頭高夫「ショーペンハウアーと東洋の宗教」『ショーペンハウアー読本』法政大学出版会. 2007. pp. 205-218.
- 湯田 1996 湯田豊『ショーペンハウアーとインド哲学』京都：晃洋書房. 1996.